

参加者による記録

2018年1月13日(土)

18:00～ 事前学習会・結団式

出国に先立ち羽田空港国際線に直結したロイヤルパークホテルザ羽田で事前学習会と懇親会を行った。

事前学習会・結団式では冒頭吉井会長から「参加者及び派遣組織へのお礼とともに、このWSTの主旨・目的の確認と、参加者全員にとってこのツアーの副産物としてある参加者間の交流を深めて頂き、そんな収穫も得てもらいたい」旨の挨拶を受けた。次に参加者は自己紹介と参加する上での各自の想いを披露した。

その後、事前学習会をスタートし、山岡事務局長がアジア連帯委員会の歴史・活動概要、ラオス、タイの訪問先について説明し、旅行会の蛸谷さんから旅の注意事項等の説明があった。また、訪問先での挨拶、記録、写真の役割と団長、副団長を決め、挨拶者が訪問先へのお土産を持参する等の役割分担を確認した。事前学習会終了後、場所を移して懇親会を行った。最初は緊張気味だったメンバーも懇親会での乾杯後は、各組織の社会貢献活動の取り組みや、それぞれ今回のツアーへの想いを語りあい和気あいあいの結団式となった。



事前学習会

2018年1月14日(日)

NH849便 00:30 羽田発 → 05:45 タイ・バンコク着

早朝、バンコクのスワナプーム国際空港に到着。イミグレーションで入国手続き、荷物を取って、2階の出発ロビーのバンコクエアのカウンターにチェックイン、荷物検査、イミグレーションで出国手続きをして乗り換えた。空港内のレストランで1時間ほど事前学習会を行い、PG943便でビエンチャンに向け出発。

PG943便 09:45 バンコク発 → 11:00
ビエンチャン着

ビエンチャン・ワッタイ国際空港では通訳／コーディネーターのフンペンさんと合流し、フランス植民地であった頃の建物を改装したメルキュールホテルにチェックイン。

市内のラオス麺レストランで昼食。皆にっこりしながら「美味しい」と。



タートルアン寺院
(そびえ立つ黄金の棟はビエンチャンのシンボル)

その後、タートルアン寺院、凱旋門を視察。
夜はメコン河沿いホテル3階のベランダで本場のラオス料理を堪能し明日からの強行軍に備えた。

2018年1月15日 (月)

11:30～ ファサン村小学校

報告：西山 英二

ホテルを出発し、CSA24番目校であるファサン村小学校に向かった。

道中はメコン川沿いに北上し、メコン川沿いから外れると道路がアスファルトから赤土に変わり凹凸の酷い道をひたすら走り、3時間程度で到着した。

早速、教室に案内され大きなココナッツジュースのおもてなしを受けた。

代表者、ブーンホーム校長から

○村民人口：約4,500人

○教員数：19人

○生徒数：790人

(男子455人、女子335人)

という説明を受けた。

2014年に基幹労連が建設・寄贈した校舎を使用しており、職員、生徒の方々は、とても感謝していた。また、この校舎を村の方々が大切に使っている様子が伝わってきた。

その後、校庭で色鉛筆、ボールペン、ノート、ボール、折り紙の贈呈式を行った。

新聞紙で作った兜を子供達にかぶせてあげるととても喜び、兜が落ちると急いでかぶり直す姿はとても微笑ましく印象的であった。

その後、折り紙で兜と紙飛行機の作り方を教え、校庭で飛行機を飛ばし合った。飛んでいる飛行機を追いかけるのが楽しそうな様子であり、夢中になっていた。綱引きでは女の子も裸足になり一生懸命に綱を引っ張っていた。



凱旋門
(パリの凱旋門を模して建てられた戦死者慰霊の門)



ファサン村小学校



土産の贈呈式

最後に、校舎を建設した1年後(2015年)に寄贈した井戸の様子を確認した。ブーンホーム校長から、この井戸は、水が不足する乾季に使用し、主にトイレの手洗い用、職員の方々が宿泊する施設のシャワーといった生活用水に使用されていると説明された。職員の方々と記念撮影をし、学校を後にした。

15:30～ ナカン村小学校訪問

報告：仲 政幸

1月15日(月)ナカン村小学校視察・交流を行った。

ナカン村小学校(1998年建設・寄贈)は、午前中に訪問したファサン村小学校に比べ児童数は208名(内、女子児童半分)と割と小規模な小学校で、連合愛のカンパの支援によりCSA5番目校として寄贈された。

ラオスの首都であるビエンチャンからファサン村を經由し車で約3時間の道のり、インフラ整備が整っていない為、始めは舗装された道路から段々と悪路へ、最終的には赤土凸凹道へと・・・途中、崩れ落ちそうな橋を渡り、牛の群れに遭遇する等あり、ようやく到着。

到着後、テオカペット校長をはじめ先生方から心のこもった歓迎をして頂いた。(CSAに対して感謝の気持ちが伝わった)

今回の視察・訪問目的は以下。

- ① 救援衣類の引き渡し
- ② 屋根及び天井の補修状況確認
- ③ 児童たちとの交流



基幹労連が寄贈した井戸



ナカン村小学校



兜をかぶった子供達

救援衣類、50箱の引き渡しをした後、補修の確認を行った。屋根はトタン屋根からオレンジの瓦屋根に変更され天井は白に塗装されたベニヤ板で補修できている事を確認した。確認後教室に入り子供たちとの交流を行った。予め製作しておいた新聞紙兜を子供たちに配った後、折り紙で飛行機を作り皆で外へ出て「ヌ、ソ、ン、ヤ」「1、2、3」の掛け声で飛ばしたり綱引きをしたりと子供たちと笑顔で楽しい時間を過ごす事が出来た。最後に記念撮影をし、皆とお別れするのを惜しみながら帰路に向かった。

2018年1月16日 (火)

8:30～ ラオス教育・スポーツ省 初等教育局長との意見交換

報告：椎野 幸作

C S Aを代表して田所さんが「昨日、ファサン村小学校とナカン村小学校の状況を確認した。明日はホアナ村小学校で補修状況の確認をする予定である。これからも現地の状況を確認しながら、ラオスの子供たちのためにC S Aを通じて支援していきたい」と挨拶し、それを受けて、ミトン局長から「C S Aの支援にとっても感謝している。昨12月に文科省の全国会議で報告させてもらったが、C S Aが学校を作ってくれた地域は人口が（他地区より）増加している。また、（学力のUPに伴い）外国に留学するものも増えてきている。とても素晴らしいことだと感じている。まだまだ学校は足りていないので、これからも支援の継続をお願いしたい。」と挨拶があった。



初等教育局長と

小学校の課題について質問すると、「モン族などラオ族以外の子供たちが増えてきているが、言葉が違うため小学校の勉強についていけない。あらかじめ、幼稚園で言葉を勉強させる必要があるが、幼稚園の先生が足りない。今後、全国的に幼稚園の教育にも注力していく。」との説明があった。

9:00～ ラオス教育省教育局

報告者：森本 哲平

椎野副団長より代表挨拶を行った後、バンチョン副局長より「高校生寮の建設や中古衣類の寄付等、様々な支援に対し、未来を拓くチャンス을 くれて感謝している。この感謝の気持ちを日本の関係者の皆さんに伝えてほしい」旨の謝辞を受けた。

さらに「高校生寮を建設・寄贈していただいたサンティパープ高校には優秀な生徒が増え、定期的開催されるラオス国内の統一テストでは毎回、1位・2位の上位成績者多数となり、サンティパープ高校の名前が有名になった」との説明を受けた。



教育省教育局で

また、「地方では、家から学校が遠い生徒は学校の近くに小屋をつくり、授業のある月～金までは小屋で寝泊まりして勉強し週末に家に帰るということも少なくなく、今後もCSAの支援を引き続き宜しく願いしたい」旨の要請を受けた。

政府の予算が少なく新たに高校生寮を建設することが困難であることや、地方では教師のレベルが低いといった問題があり、今後も継続した支援活動が必要であることを感じた。

10：30～ 在ラオス日本大使館

報告：仲 政幸

在ラオス日本大使館を訪問し、現在のラオスの状況及び意見交換を行った。

石田団長より代表挨拶を行った後、久野公使より貴重なお時間を頂戴し、現在に於けるラオスの状況及び概要説明をして頂いた。

説明内容等は以下のとおり。

国土は約24万平方キロメートルで日本の本州と同程度。国土の約80%が高地で内陸国である。又、多民族国家（49の民族）で、宗教は国民の約75%が仏教徒である。人口は、約650万人。主な貿易国は、内陸国ゆえ、近隣国であるタイ、中国、ベトナムが85～90%を占める。財政状況は悪く、2012/13年に公務員給与引き上げで悪化以降歳出抑制、歳入強化の取り組みを強化しているが歳入の伸び悩みが続いている。日本とラオスの2国間関係でいうと投資は近隣国の中国が断トツであり以下タイ、ベトナムと続くが、ODAでは日本はトップドナーであり援助額ではトップにあり、経済、社会インフラの整備、教育環境の整備、保険・医療サービスと言った様々な分野で援助を行っている。社会主義国の為、日本企業のような上場企業は無く国有企業で且つファミリー企業が多い。日本からは有名ところで商社では、丸紅、三井、トヨタ、製造業では三菱マテリアル、アデランスが現地へ進出している。まだまだ隣国に比べると日本からの進出企業は少ないが日本とラオスの関係はODAからしても非常に友好国と言える。日本大使館としてもCSAの活動に対しては引き続き、お願いしたい。



在ラオス日本大使館で

11：45～ ラオス赤十字社訪問

報告：山岡 みゆき

メンバーは当日急遽、ラオス赤十字社に招待された。私達が訪問するとメンバーは、公式用の応接間に通され、カンフォン会長がにこやかに迎えて下さった。

冒頭、会長から山岡事務局長にCSAへの感謝の印として記念品が贈呈された。さらに、メンバーにもラオス赤十字社の卓上カレンダーが手渡された。

カンフォン会長は、元ラオス保健省の副官房



ラオス赤十字社を訪問したメンバー

長官で、長い間救援衣類の担当官をされていたとのことだった。さらに、会長は「皆さんが毎年ラオスに送って下さる中古衣類は、大きな災害が起こった時、保健省から赤十字が引き取り、被災者に救援衣類として、すぐに届けている。本当に助かっているのでCSAに感謝している。帰国したら皆さんの組織の方々に感謝の気持ちを伝え下さい」と述べた。

なお、翌日私達のラオス赤十字社訪問の記事が、現地の新聞で報道された。



ラオス赤十字社で



ラオス赤十字社訪問記事

12:30～ ラオス保健省との意見交換

報告：高林 希和

世界各国の著名人が訪れている、入り口には安倍総理、小泉・野田元総理の写真も飾ってあるKualaoというラオス料理のレストランでラオス保健省との意見交換が行なわれた。

意見交換にはナオブッタ官房長官、ソムチット副官房長官、ラオス赤十字社のカンフォン会長や赤十字社の職員の方も同席した。

まず、ナオブッタ官房長官より、「CSAがラオス保健省に送ってくれる中古衣類は大変助かっており、心から感謝している。特に昨年は台風の被害等があり、ラオス赤十字社が被災者を助けてくれた。被災者にはラオス赤十字社が直接衣類を届けてくれている。ラオス保健省はラオス赤十字社と一緒に被災者対策をしたいと考えている。衣類は優先順位を考えて、必要と思われる所から配布をしている。」と述べ次の業務のため退席した。

ラオス赤十字社のカンフォン会長は2016年からは地方の県知事、その前は保健省の副官房長官だったとのこと。

松末さんより代表挨拶を行った後、会長は松末さんが大阪出身と知ると、大阪から救急車を2台寄贈していただいたことがあると話した。また地方の県知事だった時に、京都ライオンズクラブより桜の木を寄贈してもらったとも話したので、地方自治体や民間会社からでも、色々な支援を行っていることを知ることが出来た。

おまけ：「日本人の血液型はA型が一番多いのですが、ラオスはどうなのですか？」と質



ラオス保健省との意見交換

問してみた。

どなたもすぐに答えることが出来なかったが、会長は、「就任したばかりだからわからない」とおっしゃっていたものの、わざわざ担当の方に電話して確認して下さった。

答えは・・・一番多いのはO型、その次がB型だそうです。

日本人であれば、医療従事者ではなくても血液型の割合は知っている人が大半かと思うが、占いであったり、血液型の話で盛り上がったりするのは日本人特有なのかもしれませんね。

赤十字社会長と山岡さんはO型だったので、会長は「O型はGenius（天才）！」と盛り上がっていた。

ちなみにフンペンさんはB型、私もB型です。さて皆様は・・・？



ラオス保健省官房長官とラオス赤十字社会長

14：10～ ラオス保健省衣類保管倉庫

報告：松末 祥司

ラオス保健省の衣類保管倉庫を訪問し、意見交換、視察した。

倉庫担当者の説明では、昨年11月16日に日本から3,629ケースが運び込まれたが、そのうち100ケースが輸送時などに問題があり、段ボール箱が崩れている物があったが、衣類を大きなビニール袋に入れてもらっているので、問題なく使えるとのこと。現在までに1,349ケースを各地に配ったので、倉庫には2,280ケース残っている。

今後は残りの2,280ケースから文部省にも分けるとのこと。

メンバーからの「1年間ですべて配り終えるのか？」と言う質問に対して、災害などで急に必要になることがあるので、ある程度のストックはするがそれ以外は全て配り終えてしまうので、数は足りていないのが現状だと説明を受けた。

また、「足りていない衣類の種類は？」との質問に対しては、圧倒的に男性用の衣類が足りていなく、男性用は送られてくる衣類の約20%しかないとのことだ。その他、北部の寒い地域に送る冬物衣類に関しても足りていないとのことだった。

その後、倉庫前で引き渡し式を行い全員で記念撮影を行った。倉庫内の見学では、各メンバーの組織から送られた箱を探し、見つけた人は記念写真を撮っていた。

衣類保管倉庫の視察を終え、男性用衣類や冬物衣類が足りていない事を確認できたので、単組での取り組みに繋げていこうと思った。



ラオス衣類倉庫で引渡し式



ラオス衣類倉庫で意見交換

15:45～ ラオス地雷博物館

報告：石田 輝正

ビエンチャン市内にある「ラオス地雷博物館」を見学した。

ラオスはベトナム戦争（1962～1973年）時、北ベトナム軍が南へ移動するための空路として使われていたことから、そのルートを中心にアメリカ軍が200万～300万トンの爆弾を投下し、そのうち約3割が今なお不発弾として残っており、ラオス国土の3割以上が危険区域となっている。館内にあるラオスの地図では、右下半分が投下された地域として赤く表示されている。

不発弾による被害はビデオで紹介されているが、一番危ないのがクラスター爆弾で、畑を耕している際に鋤が当たって爆発したり、料理をするために地面で火を起こした際の熱で爆発する等、日常生活の中で被害は発生し、毎日一人以上、年間400人ほどの犠牲者が出ている。また、そのうち40%が子どもで、畑や森に落ちている蛍光色にペイントされた不発弾は遊び道具にしか見えないため、不用意に触れて爆発する事故が絶えず、爆弾がすべて撤去できるまでには、あと100年以上かかるといわれている。



地雷博物館を見学

その一方で、不発弾が多いのは貧困地域で、こうした地域では不発弾を「スクラップメタル」として生活用具に使ったり、アクセサリとして再加工したりする等、ラオスの人たちを今なお殺傷し続けている不発弾が生活の糧となっているという。

館内には、爆発で失った場合の義足を展示しており、何とも言えない虚しさや憤りを感じると同時に、ラオスにとっての「戦争」はまだ終わっていないと思った。

16:20～ 難民を助ける会ラオス事務所

報告：石田 輝正

ビエンチャン市内にある「難民を助ける会ラオス事務所」（連合「愛のカンパ」助成団体）を訪問し、岡山事務局長と大城プロジェクトコンダクターから説明を受けた。

難民を助ける会は、日本で生まれた国際NGO組織で、1979年にインドシナ難民支援を目的に発足し、以来、活動地域や分野を広げながらこれまで60を超える国・地域で支援活動を展開し、現在は15カ国で活動している。

ラオスでの具体的な活動については、2000～2011年は車いす製造普及、2012～2016年は障がい者の収入向上、2014～2015年車いすバスケットボール、2016年～は学校給食（ナマズ養殖）などに取り組み、障がいを持っていても取り組むことができる生産品目や、自宅の小さな場所で低投資・低リスクの生産品目、さらには、市場価値がありながら市場競争が比較的低い生産品目を意識して取り組んでいることが紹介された。



難民を助ける会で説明を受けた

18:30～ 卒寮生との交流

報告：田所 伸吾



佐古レストランで

夕方は「サンティパーブ高校生寮の卒寮生」との交流会が、佐古レストランで開催された。

メンバーがレストランに到着した時には卒寮生が集まっており、笑顔で私たちを迎え入れてくれた。今回集まってくれた卒寮生は27人。メンバーが横長のテーブルに分散して着席し、その間に卒寮生が着席する形となり、卒寮生は少し緊張しているようにみえたが、久しぶりに仲間に会えたことで喜びにあふれた様子でもあった。

懇親会がスタートし、最初に今回の幹事役であり外務省に勤務するシーボンさんから「CSAからの支援に対して感謝している。自分たちはこれからも頑張っていく」と、感謝の思いと強い決意を聞かせてもらった。メンバーを代表して栗村さんが挨拶を行い、その後、それぞれの席でカタコトの英語で交流したり、身振り手振りで意思疎通を図っていたりと和やかなムードで歓談していた。やはり優秀なラオスの若者たちなので、多くの卒寮生は英語が話せ、さすが、と思う場面であった。

1時間ほど食事をしながら歓談をした後、卒寮生から自己紹介を兼ねた挨拶をもらった。まずは高校生寮の1期生であるヌーソンさんからスタート。彼は2007年に日本へ留学し、6年間大学で学んだあとそのまま日本の企業へ就職し、2年間働いた経験があるそうで、日本語がペラペラであった。そしてその後はヌーソンさんが通訳をする形で次々と挨拶をいただいた。卒寮生はそれぞれ外務省など政府の機関で働いている方が多く、大学で勉強をしている方も医療であったりビジネス関係であったりと、とても優秀な方ばかりであったが、それぞれ挨拶の冒頭に「CSAの支援があって今の自分がある」と感謝の言葉を述べており、CSAの活動が今もラオスの若者達の心に根付いていることはとても感慨深いものであった。

20時頃からじゃんけんゲームを行い、優勝者にはCSAから記念品を贈呈した。全員で記念撮影を行ったのち、個別にスマホで写真を撮り合っていたが、若い女性の卒寮生も恥ずかしがることもなく、我々と一緒に写真に納まってくれたところは、心の優しいラオスの国民性なのかもと感じさせられた。

楽しい時間はあっという間に過ぎ懇親会はお開きとなったが、会が終了後も別れを惜しむ卒寮生がなかなかその場を離れようとせず、いつまでも話し込んでいる姿がとても印象的であり、我々との懇親会を通して彼らの交流の場になっていることが少しうれしく思う瞬間でもあった。

メンバーも帰りのバスの中で充実感にあふれ、余韻に慕っている様子が伺われ、私自身も小学生との交流とは違った心の触れ合いに感激し、ラオスの未来は明るいと感じた。



卒寮生との交流

2018年1月17日 (水)

16:00～ ホアナ村小学校

報告：西山 英二

ビエンチャンより国内線の飛行機でルアンプラバンに移動した。ルアンプラバンから車で2時間程度走りホアナ村小学校に到着した。

ホアナ村小学校では低学年のかわいらしい生徒が多く、我々の到着を待ち受けてくれ、とてもうれしそうに歓迎してくれた。早速、校長先生と意見交換を開始した。セントラル硝子労組代表の挨拶の後、校長先生からホアナ村の概要を聞かせていただいた。校長先生のお腹には赤ちゃんがいて、とても幸せそうであった。

○人 口：4006人（4つの村664家族にて構成）

○小学生：533人（男子、女子とも半々）

幼稚園（プレスクール）：185名（男子、女子とも半々）

○教員数：18名（小学校12名、プレスクール（幼稚園）6名）

○小学生の落第率：0.7%

ちなみに小学校として困っていることは、

①幼稚園（プレスクール）が不足している。

※ラオスでは民族によって言葉が異なるため、幼い頃からラオス語に慣れておかないと先生と生徒で言葉が通じなく退学してしまう生徒が多い。よって小学校に入る前にラオス語に慣れておく必要がある。

②幼稚園（プレスクール）の教室が不足している。小学校の教室を転用している。

③教科書が不足している。

校長先生との意見交換の後、子供達に新聞紙で折った兜をかぶせてあげるなどをして交流した。

車椅子の生徒が一人で寂しそうにしていたので兜をかぶせてあげると、とても嬉しそうに微笑んでいた。

その後、セントラル硝子労組によって補修した箇所を視察した。2017年7月14日から補修工事を開始し8月末には完了した。2017年5月にセントラル視察団が訪問した時に困っていた雨漏り、トイレの故障、天井の剥がれ等は補修されており、改善されていた。

その後、歓迎の儀式であるバーシーセレモニーが行われた。村の長老らしき方が何かを



補修されたホアナ村小学校



ホアナ村小学校の生徒たち



バーシーセレモニーの様子

唱え始め儀式が始まった。先生や地元の方全員から手首に紐を巻きつけてもらい儀式は終了した。私達への歓迎や健康への願い、これからの旅の安全を願う意味が込められていたので、とても感動的なおもてなしを受けた。

セレモニー終了後はサプライズでの歓迎会となり、現地の食事が振舞われた。夕方になり、帰路が2時間かかるので、我々が帰ろうとした時、校長先生の寂しそうな顔はとても印象的であった。名残惜しい気持ちで小学校を後にルアンプラバンに戻った。



サプライズの食事会

2018年1月18日 (木)

9:00～ ルアンプラバン県教育省

報告：井上 さとみ



ルアンプラバン県教育省前で

ルアンプラバン県教育省では、ユーン局長、ワントーン事務局長にご対応いただいた。

まず団を代表し米田さんが挨拶をおこなったあと、ユーン局長から「連合には多くの支援をいただき、本当に感謝している。ルアンプラバン県にいくつかの小学校、そしてサンティパープ高校の寮も建設し、運営してくれている。2002年に寮ができてから、寮生から全国テストで1位になる生徒が出るようになり、卒業生は大学に進学したり、留学したりしている人も多くいる。公務員や国営企業で

働くなど、国に貢献している。県の教育は発展している。」と感謝の言葉をいただいた。

また、ユーン局長はサンティパープ高校について、「県外からもサンティパープ高校の教育を学びに、先生が見学に来る。地方や県外からもサンティパープ高校に入学する生徒もいる。寮があることで貧しい家庭の子どもでも教育の機会を得られる。」と話した一方、課題として、「例えば図書館だったり教科書だったり都市部にはたくさんあるが、地方にはまだ少ない。また科学や物理の実習場所や機材は都市部でも足りないが、地方ではさらに足りない。地方の学校では師範学校を卒業後にボランティアで教えている先生もいる。都市と地方で、先生のレベルに差があるという問題もある」と述べた。

その後、山岡事務局長より、今年5月に予定されているサンティパープ高校生寮の契約更新の中身についての要望があるか質問した。ユーン局長は「これから県内の中学校の校長たちにも、継続して支援していただけるということを伝える。そのうえで要望を集約したい。これからも継続して支援していただけるとありがたい。」と回答。それに対し、事務局長からは「CSAは継続して支援することが重要だと認識しているので、県教育スポーツ省としても、当事者として、支援の内容や支援金の使い道に責任をもって取り組んでほしい。」との要望が述べられた。

また、連合の石田さんより「私たちの貴重な募金を、ラオスの高校生たちのために有効

に使っていただきたい。」とメッセージが送られた。

その他の質疑応答は以下の通り。

Q：サンティパーブ高校に見学に来た先生方が、各県に持ち帰っていることは何か？

A：隣の県の教育は以前よりは発展したが、まだ先生のレベルが低い。特別に優秀な生徒に対する指導がもっとできるようにならなければならない。

最後に、ユーン局長から「心から、日本の連合の皆さまに感謝を伝えたい」と重ねてお礼の言葉があった。

その後、庁舎の正面入り口前で全員で記念撮影を行い、ルアンプラバン県教育省を後にした。

9：40～ サンティパーブ高校生寮

報告：栗村 武志

我々が高校生寮へ到着した時、高校生が花道で拍手で出迎えてくれたことは感動した。その後、寮監より報告を受け、メンバーを代表して仲さんの挨拶。その後、高校生の踊りと歌により感謝と歓迎の気持ちが示された。



高校生寮で代表挨拶

■寮監より報告

現在、寮生は90名、高校1年～3年生までの生徒が学校と寮で学んでいる。現在、寮生は頑張って厳しい寮生活を送っている。出かける際は外出許可をもらい、外出している。今年の4月に学力全国大会が控えているので、今後はもっと厳しい寮生活をおくる必要があると考えている。

寮生活の中では勉強以外にも踊りの練習もしており、非常に上手。他にもサッカー等のスポーツも練習もしている。

毎朝、ラジオ体操が終わったら野菜の栽培もしており、食べるものに困らないよう学んでいる。日々の生活の中では自分たちの部屋を毎日清掃している。

寮生のために連合とCSAよりご支援を頂いていること、大変感謝している。何も感謝できないが、連合とCSAの方々に御礼を申し上げたい。皆さんと皆さんの家族の方々の健康をお祈り申し上げる。

■校長よりあいさつ

昨年、数学と物理の全国大会で寮生が1位だった。今年の4月も大会に寮生を送り出す。スポーツ以外の交流でも寮生は全国的に有名になった。寮生たちも皆家族のように助け合っ生活している。

■寮生との質疑応答

Q：寮の食事について何か困っていることあるか？

A：イピライさん（高3）；家より良い。食事もおいしい。

トゥーヤンさん（高3）；友達と一緒に食事ができることが楽しく、おいしい。

Q：将来の夢はある？

A：①医学部で勉強したい。

②物理の先生になりたい。

③建設関係の仕事をしたい。

④外務省に入りたい。

⑤医学の勉強をして日本へ行きたい。

⑥世界中を旅して皆に伝えたい。

⑦地方の学校の先生になりたい。

⑧外国交流をして将来は大使になりたい。

⑨日本語とスペイン語の勉強をした
い。

⑩国語の勉強をしたい。

⑪自分の街にはごみが多く、このゴミ問題に対応したい。

Q：日本に対してどのようなイメージをもっているか？

A：行ったことがないが、習慣などに興味があります。ぜひ勉強をしたいと思っている。

Q：ものづくりをしたいと思う人はいますか？

A：回答なし。



高校生寮の前で

その後、衣類の引き渡し式を行い、我々を歓迎する儀式、バーシーセレモニーが行われた。祭壇を囲み、お祈りを頂いた後にスーフアンを全員に巻いていただいた。また、儀式後には踊りや歌の披露があり、後半には生徒と一緒に踊りを楽しみ交流を深めた。

メンバーからは日本語を教え、生徒は楽しそうに日本語の発音をまねて学習した。

交流会後、寮の視察を行った。各部屋の使用状況や天井、トイレも視察し、きれいに使用している状況が確認できた。寮だけでなく、トイレの老朽化に対して何らかの手当てが必要と感じた。

その後、寮の中を案内いただき、各部屋の使用状況について見せていただいた。最後に寮の前で全員で集合写真を撮り、寮生に見送られて、寮を離れた。

2018年1月19日 (金)

10：30～ タイ社会開発福祉省衣類引き渡し式

報告：井上 さとみ

宿泊先のホテルからバンコク市内にあるタイ社会開発福祉省に向かった。到着するとロビーには、飾り付けが施されたステージが設置されており、すでに多くの職員や報道陣の方々が待ち受けていた。CSAの中古衣類支援が、タイでも大きく評価されているということを感じた。

開会の挨拶で、CSAの概要や昨年の中古衣類支援の状況、今年は5,103箱、8コンテナ分の衣類が届いていることが紹介され、続いて衣類の引き渡しセレモニーが行われた。今回の訪問団を代表し、石田団長は「今年は、5,103箱の衣類をタイに送った。これらの衣類が有効に使われることを期待する。今後も、働く仲間力を結集し、日本とタイの友好のために頑張っていく。」と挨拶した。その後、タイ社会開発福祉省よりワーキング・スタディ・ツアーの団員全員に記念品が贈呈された。

タイ社会開発福祉省のスチトラ副大臣からの挨拶では、「多くの衣類を送っていただき、感謝申し上げます。これからタイ各地の救援衣類を必要としているところへ配ります。今後もこれまでと変わらず、支援を続けていただけるとうれしく思う。」と言葉があった。

最後に、タイ社会開発福祉省担当者の方々と訪問団の全員で記念撮影を行い、閉会の辞をもって、衣類引き渡し式が終わった。

衣類引き渡し式の後、社会開発福祉省の職員の方から、庁舎内にある障がい者の方々が制作した商品を販売するショップをご案内いただいた。タイの文化も反映されたハンドメイド商品が並んでいた。メンバーは興味深く店内を見学したり、買い物したりした。

その後、バンコク市内のタイ料理店へ移動し、タイ社会開発福祉省の職員の方々と昼食会を行った。



タイへの衣類引渡し式

13:30～ タイ社会開発福祉省救援衣類倉庫

報告：高林 希和

ムカダ局長（女性）より訪問のお礼が述べられた後、「社会開発福祉省の先ほど引き渡し式典が行われたのがオフィスであり、オフィスビルでは中古衣類の出入れをするのが難しいので、衣類倉庫で受け入れや仕分け等、全体的なことを行っている。」との報告があった。

その後、職員の紹介、パチャラさん（女性）がここで管理をしていて、スッチーさん（男性）・コンファンさん（男性）・あとはガンさんの紹介があった。さらに「私は今年で退職するので、今後はナックリヤーさん（女性）が引き継ぐ。2015年に編成変えがあり、以前は子供の衣類も分けていたが、子供や不自由な方の人の衣類は別の所で分けている。今はCSAからの衣類が一番多い。バンコクを見ると、支援は必要無いと思われるかもしれないが、各県にオフィスがあり、地方を中心に、必要な人に衣類を配布している。」との報告があった。

ここまでのお話（5分程？）を途中に通訳を挟む間を与えずに、一気にお話された。

通訳のジェニーさんが「めっちゃ長い・・・」とボソッと呟くレベル。



衣類倉庫

まだまだ続くとのことで、一旦遮り、井上さんが代表挨拶。井上さんは「今回の訪問の目的と、私の労組ではまだ中古衣類の取り組みはしていないが、今回の訪問を取り組むきっかけにしたい」と挨拶し、お土産を渡した。

再びムカダ局長が「仕分け作業では、男性・女性・子供の中で夏服と冬服に分けます。男性服は女性服に比べて、圧倒的に少ない。地方ではなくバンコクでもホームレスには衣類の支援が必要。政府は家が無い人に仕事をしてもらおうようにしたいので、男性服が本当に必要。ホームレスはバンコクだけではなく、

地方にもいるので地方のホームレスの方々にも衣類を渡している。」

以上、途中で咳き込みながらもブワッと、言葉も通じない私達に一生懸命お話をして下さいました。通訳のジェニーさんが要約して下さいましたが、本当はもっともっと伝えていたのだと思った。

その熱い口調に、言葉は通じなくてもタイ政府は私たちが送っている中古衣類を必要としているという想いが伝わってきた。

■質疑応答

Q：災害用に衣類をキープしているのですか？

A：はい。キープというよりも支援の要請を受けたら送付している。在庫を管理し、ゼロにはならないようにし、次の年の分が送られてくる頃には全部倉庫が空になるように計画的にしている。

Q：スカートは本当にダメなんですか？

A：地方に行くと、やはりズボンのニーズの方が多い。

（山岡事務局長の説明）日本からの中古衣類の発送は、最初のほうに届いたものから先にラオスに発送しているので、締め切り日に近くに送ったものがタイに届けられる。去年はラオスへ6コンテナ、タイへ2コンテナ送った。ラオスの女性は民族衣装の巻きスカートを着用しているためスカートは不要である。説明を聞いてスカートを送るのは控えた方が良いことが確認出来た。

Q：タイ国内では、人々は中古衣類を困っている人のために送る活動はしているのか？

A：政府は衣類よりは、お水やお米などの食料やオムツなどを集めている。タイでは、衣類は擦り切れるまで着るので、集まっても渡せないような物が多い。日本からの衣類は綺麗なもので助かっている。

Q：ズボンや男性服以外でも具体的に必要なものはあるか？

A：この2つが本当に必要。あとは毛布やタオルケット。

Q：毛布はどのような時に使うのか？

A：北部や山岳地域では冬は寒いので必要。

（山岡事務局長の説明）毛布はかさ張るのでダンボール箱にあまり入れられない。

Q：あまりにも汚れていたり古いものは除けるなど分別して送っているが、届いた衣類でこれは渡せないな？というような物はあったか？

A：今まではまだ無い。また、渡した先からのクレームも無い。

その他の要望として

女性服については基本的には作業服等を希望するが、可愛い服を喜んでいる人もいる。ぬいぐるみやバッグも本当は嬉しいが、税関的に無理なのは理解している。

最後に、山岡さんがスッチーさんに「今



タイ衣類倉庫での意見交換

年の公式の衣類送要請文を早めに送って欲しい」と伝え、意見交換会は終わった。

その後、倉庫の見学をした。倉庫前では、昨年のワーキングスタディツアーメンバーが訪問した際の様子を収めたDVDが作成されていたので、その視聴をした。さらに倉庫の方がどのように仕分けしているかのデモンストレーションを見学した。倉庫内には、白い大きな袋に詰められた衣類が仕分けされた状態で収納されていた。

まだ仕分け前の天井まで積まれたダンボールの中から、偶然にも弊労組“カネボウ労組関西支部”からの送り状が貼ってある箱を発見したので嬉しくなり、送り状を破って持ち帰った。これを見て倉庫の担当者も一緒に喜んでくれたので、交流が図れた。

15:00～ 在タイ日本大使館

報告：高林 希和

対応して下さった岡本二等書記官は、三菱重工グループ労働組合連合会のご出身の方で、森本さんは代表挨拶後、手土産の焼酎をお渡しした。

岡本二等書記官は、ODA支援の中でも1千万円以下の小額で緊急性が高い支援を担当されているとのことだった。例えば、水道が無い地方への水の支援、学校の校舎の建て替え、病院の壁の修復、高齢者支援を行っているので、地方を見る機会は多いとのこと。

タイの労働事情・政治・経済概況について、資料を基に説明をして下さった。説明内容は以下の通り。



在タイ日本大使館の前で

国土面積は日本の約1.4倍、人口は日本の約半分の6,721万人（2015年）だが、住民登録がしっかりしていないので、およその数字。

2016年10月にラーマ9世が崩御され、お葬式までの1年間国民は喪に服しており、2017年10月にお葬式を行い、喪が明けた。

日系企業進出の状況について、日本人商工会議所加盟企業数は1,759社（2017年11月末）で世界最大級であるが、昨年初めて日系レストラン数が減って頭打ちになった。

タイの労働事情については、日本では3%である農林水産業の比重が32%と多いものの、儲けが出ていない状況。タイでは農林水産業や屋台、タクシー運転手などのインフォーマルワーカーが6割を占めていて、彼らは社会保障が手薄。

高齢化社会と労働力不足は日本よりも早いペースで進むとも見られており、定年延長の法整備もされた。

女性の就業率は高く、年齢別の労働力率を見てもM字カーブは見られない。企業で働いている、政府の要職に就いている人は女性が多い。岡本二等書記官の視点では、男尊女卑の思想の下、女性はしつけを厳しく育てられるが、男性は大切に育てられて大人になり、結果仕事が続かないのではないかと。

時には、ご自身のお給料がドルで入ってくるので為替的に厳しいであるとか、雇っている運転手が定年延長してもなお働き続けたいと言っており、ちょっと困っているなど、ユーモアを交えながらタイの実情を説明して下さったので、とても分かりやすく学ぶことが出来、貴重な時間となった。

18:00～ お別れ夕食会

バンコク市内の渋滞を心配して、時間に余裕をみてスワナプーム空港に向った。車の流れは比較的スムーズで、予想より早く空港に着いた。

チェックインまで時間があったので、空港3階の中華レストランに席をとり、連合主催の「お別れ夕食会」を行った。

まず、団長が全員無事に全ての日程が終わったことに対する労いの挨拶をした。メンバーからは「現地での視察や経験を組織に持ち帰って報告したい」との声が出された。皆、強行スケジュールで疲れも見えたものの、この1週間の労を労い合った。そして、新しい出会いと別れにちょっと複雑な表情も。



空港内でのお別れ夕食会

22:55 NK850便 バンコク発

2018年1月20日(土)

06:30 羽田空港着

無事羽田に到着。入国審査、荷物を受け取り、ゲート外で石田団長の解団宣言の後、別れを惜しみながら再会を誓いつつ、それぞれ帰路に着いた。



解団式